

---

# CROSS † CHANNEL ~ Again to that world ~

CROSS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CROSS CHANNEL ~ Again to that w

orld~

### 【ZPDF】

N6900A

### 【作者名】

CROSS

### 【あらすじ】

一人の少年と、その仲間たちのあの暑い夏が再び…

## プロローグ（前書き）

このゲームを知っている方、知らない方もどうか…楽しんで頂けたら、幸いです。

更新遅れたらすみません…

## プロローグ

群青学園…

ここに一人の少年が通っていた。  
名前は『黒須太一』。

この少年は皆といる時は陽気に振る舞つていた。  
しかし、一人になると無表情になる。  
彼は感情がなかつた…。

だから振る舞つていたのだろう。

一人の少女は  
「あなたはうすぎたない化け物です」  
「人間に擬態しているに過ぎない」  
とも言つた。

しかし、彼はもうこの世界にはいない。  
しかし、生きている。

彼はラジオ放送をしている。

この世界ではなく、もう一つの世界で… その放送は皆の世界にも届  
いている。

その放送は瞬く間に広がつていった。皆に生きる希望さえあたえた。

「ありがとう  
と伝えたい。

しかし…伝えることができない。

この世界にいないから…

そしてまた…

あの暑い夏の日が再びやってきた…。

## プロローグ（後書き）

これからも書くので、どうか… 暖かい目で見守っていてください。  
また見て頂けたなら幸いです

第1話 1日目／朝／？（前書き）

かなり遅れました  
すみません…

## 第1話 1日目／朝／？

「今日も暑いな…」

一人の少女はそう言いながら坂を登っていた。  
少女の名は『佐倉 霧』。  
群青学園に通っている。

私は今まさに学校に向かっていた。

霧

「どうして…暑いのかな…」

私は持っていたタオルで汗をぬぐった。

しづらしくすると、交差点に出た。

その交差点の近くに小さな商店がある。

看板は『田崎食料』

私はよくここを利用している。

理由はここにしか近くに商店がないからだ。

霧

「ごめんください…」

誰もいなかつた。

この店は留守が多い。

この店主は無類の鉄道マニアで、ふらりと店をあけては電車の『写真』を撮りに行つてゐるらしい。

霧

「また写真を撮りに行つてゐるのかな…」

私はそうだと思い、ツケでジュースを買つことにした。

「どれにしようかな…」

田の前に『野菜ジュース』があつた。

霧

「これにしようかな…」

私は『野菜ジュース』を手に取り、ノートをちぎり貼つた。私はちらりと皆のを見た。

「9／2、オレンジウォーター…山辺 美希。」

「9／3、マグネシウムサイダー…桜庭 浩、普通です。」

「9／4、桃源ウォーター…宮澄 美里。」

「9／5、レモン水…桐原 冬子」

みんなつけすぎたよ…。あと、桜庭先輩、コメントはこらなことです。

「あれ?」

よく見ると古い紙が一番下に貼つてあつた。

「9／2、野菜ジュース…黒須 太一」

「まだ貼つてあるんだ…」

私は彼のことを思い出した…。  
ひどいことを言つたな…。

私は田崎食料を出た…

第1話 1日目／朝／？（後書き）

また読んでいただけたら幸いです

第1話 1日目／朝／？（前書き）

取り合えず次です

# 第1話 1日目／朝／？

坂を登つていると

???

霧

霧

「美希ー。おはよー。」

声をかけた少女は『山辺美希』。私の親友だ。

「いつも」の時間だよねー。」「

霧

卷之二

霧

「ん? どうしたの?」

霧

おのれ……

美希

「せやへぬなれば……」

霧

「あ……あのね……太一先輩のレシートが田崎食料に貼つてあつたんだ……」

美希

「 そ う な の ？ そ つ か ？ 」

私にとって、黒須太一……太一先輩はかけがえのない存在になっていた。

だけどなった直後に……いなくなっていた。いなくなつた…

美希

「また会いたい…？」

霧

「うん、会いたい…」

先輩…また会えますよね…？

私は太一先輩のことを思いながら美希の話をうわのそらで聞きながら学校に向かつた…

学校につくと…

美希

「桐原センパーイー！」

桐原と呼ばれた少女は後ろを振り返つた。

冬子

「おはよう。山辺、佐倉」

霧

「おはようございます、桐原先輩。」

美希

「おはようございます」

私たちは各々挨拶をした。

美希

「そうだ、先輩。霧が黒須先輩のレシートを見つけた見たいですよ。」

冬子

「そうなの？佐倉？」

霧

「はっ、はい……」

美希つてば……余計なこと言つて……

冬子

「そつか……太一のレシートが……」

「私たちはそんなことを話ながら教室へ向かつた……」

## ループ世界+1日目／朝

「ふあー…ふう…」

朝…なんて清々しいんだ…！」

「さて…今日も『日課』をしますかねー」

俺は今日も学校に行く…。ラジオの鉄塔を建てるために…。

「世界と自身とを…」

俺はつい最近から学校に行くまでと帰るときに歌を聞くことにしている。その他の時間は極力聞かないことにしている。

何故かつて？そりゃあ勿論…

電気がきてないからだよ…！

つと…自己紹介がまだだつたな。

俺の名前は『黒須 太一』。元（？）群青学園の生徒だつた。今は行つてないけどね…いや…行つてるけど、行つてないに等しいかな…

なんでだつて？それはだな…ちょうど去年だつたっけ…謎の組織に連れ去られて…じやないぞ！

…まあ、簡単に言つと…

『俺を含めた8人+1人がループ世界（一週間を繰り返す）に閉じ込められ、俺以外（正確に言うと俺+1人）の皆を還して、俺1人だけこのループ世界に閉じ込められたまだから』

かな…。

辛いかつて?そりやあ…辛いに決まっている…悲しいし…でもな…これでよかつた…人を傷付けなくて済むつて想つと…この世界に残つてよかつたんぢやないかつて…よく思つんだ…

「つて…誰に話しかけているんだか…」

俺は…今も生きている…この世界で…  
お前らも生きているよな?みんな…?そして…霧…

みんな…びつしているかな…

元気にしてるよな…  
会いたいよ…霧…

俺は昔の事を思い出しながら学校へ向かつた…

学校に着き…

「よつしゃあー今日も頑張るぞー」

俺はラジオ塔を造り始めた…

## 第1話 1日目／夕方

「今日も授業が終わつたし……『じつじょ』つかな……」

私は「これからにじつじょの」とを考えてみると……

美希  
「霧～！何してるの？」

霧  
「これからにじつじょか考へていたんだ。」

私は美希にそう言つた。美希は

美希  
「部室に行つてみる？」

霧  
「えー？ 部室？」

部室…先輩との思い出がある場所…あそこに行くと…胸が痛くなる…辛くなる…どうじょつかな…

霧  
「ん～…」

美希  
「ど～するの～…？」

霧

「行つてみよっか…」

美希

美希は嬉しそうに歩いていった。

霧

一 楽しそうだなあ  
…」

私は美希の後ろ姿を見ながら、美希の後を追い掛けた。

部室には先客がいた。

美希

美希は先に来ていた桐原先輩に質問をした。  
「美希…直球過ぎるよ…」

冬子

一  
ちに違うわよ！朝の佐倉の話を聞いて来たくなつたのよ。

私の話？……ああ、朝の話か？。

霧

「そう……なんですか……。私もてつきり暇なかと……」

卷之三

「すつすみません……」  
霧、美希

冬子

「別にいいわよ…。ふう…久々に来たわね…」

霧

「はい…。あれ以来、来てませんでしたから…。来たら思い出して胸が苦しくなるから…」

美希

「霧…」

冬子

「佐倉は…太一のことが好きなの?」

霧

「えつ…?…はい…。」

冬子

「そつか…」

「私たちは久々に部屋に来て一年前のあの夏の事を話していた…」

十ループ世界十一日目／夕方 夜（前書き）

更新遅れていますません…（-\_-;）

十 ループ世界+1日目／夕方 夜

太一

「え～と…」これがここで…これがここだら…。んで…これがここ…。

」

俺はいつの間にか熟練の技を身に付けていた。それもそのはず、独りでラジオ放送をしているからだ。

太一

「ん～…これがここで……よし…これでいいはず…」

太一

「ふう…今日はこれくらいにするか…」

俺は今日の作業を終えたので帰ることにした。

いつもの帰り道…でも今日は…

太一

「哀しいな…思いださなければよかつたな…」

霧…会いたい…。  
それのみんな…  
声を聞きたい…。

ぐううう～…

太一

「ん~… 晩飯は… いつも通りに作るか…」

「この世界にどどまり、俺は自炊をすることが出来るよつになつた… つてか… それぐらいは出来ないとまづい…。」

太一

「ああて… 今日は… ジャガイモでも蒸かして食べるか…」

「じゃがいもを蒸かす… 霧に作つてもらつたつけな…。」

太一

「なつかしいな… 会いたい…」

「俺はそう思いながら、懐かしい食事を味わつた…。」

太一

「さて… 食事も風呂も終つたことだし… 日課をして寝るか…」

「俺は毎日日課をしている。何かつて? それは… 日記だ。日記だけが… 唯一形として残せる物だからな…。」

太一

「さて… 書くか…。」

「今日の出来事を事細かく書く… それが唯一… 俺を書き留める… 俺が存在し得る事…」

「俺は日記を書き始めた。」

太一

「よし……後6日で次のノートに変更だな……。一週間がたつのは早いよな……」

俺は、あれから何故か年をとらなくなつた……理由は不明……

太一

「ふあああ……寝よ……」

俺は……寝た……

第2話／三日田／昼（前書き）

କାହାରିରିମାନିଦିକ... (<—>.)

## 第2話／三日目／昼

霧

「人集めか…。何人集めよう…」

私は人を集めることになった…。なんで集めることになったかって？それは…

数十年前…

美希  
キヤンフ  
「合宿をしようつー」

美希がいきなりそんなことを言つた…。

霧  
「合宿！？なんで！？」

美希

「いや…、部活の面々とは最近あまり交流ないでしょ？だからさ、合宿やつて交流を深めようかなつてね…」

霧

「交流を深めよつてね…。それは以前、太一先輩がやつて失敗したじやない…。」

美希

「いいじやん…しようつよー…」

霧

「でも……」

したくない訳じゃない…

でも…

？？？

「その話、乗ったわ…。」

いきなり声がした。

霧

「えつーー？」

美希

「その声は…支倉先輩！？」

曜子

「その通りよ、山辺。よくわかつたわね、佐倉はわからなかつたの  
に…。」

美希

「えへへへ、頑張りましたから

霧

「すみません…」

曜子

「いいのよ、気にしないで、佐倉。それよつせつその話だけじ…。」

美希

「あつ、はい。畠で合宿の話ですよね。支倉先輩も行きますか?」

曜子

「ええ、行くわ…」

美希

「やつたあ じゃあ、日時と場所はどうします?」

霧

「日時だけ…日曜日にしない…? 来週の月曜日は休みだし…」

曜子

「そうね…それで行きましょう…。場所は…祠のある場所で…」

美希

「はい、いいですよ 決まりです! 取りあえずは… 支倉先輩は富澄先輩を、霧は桜庭先輩と島先輩を頼むね」

曜子

「わかったわ…」

ヒュウ…

支倉先輩は消えた…

美希

「じゃあ、私たちも行こう」

霧

「わかった、じゃあまた後で…。」

「こういう感じで私は人を集めることになった…」

# ナループ世界十二日目（前書き）

中々大変ですよね（^\_^;）

太一

「あれだな……もつ……慣れてくると……すぐ終るよな……」

あれから俺は、長い周をかけてラジオの鉄塔を一人で完成させることを早くできるようになった。それもそのはず、もつ何万周やつたか……

できて当たり前だよな……

そんなふうに思えるようになったことが、不思議だ……

太一

「ち……暇だ……何をするかな……」

何をしよう……暇すぎる……

太一

「何か作ってみようかな……」

そうだな……そうしよう……

太一

「毎週放送して……走るのは大変なんだよなあ……」

どうしよう……

やはりやるなら……生放送がいいよな……

太一

「タイマーでも作ってみますか！」

生放送じゃなーってのは… ネックだけど…

たまには… な…

太一

「よし…こつちゅやつてみますか！」

そして、俺はタイマーを作り始めようとしたら…

太一

「思つたんだけ… 材料あるかな…」

この学校にあるとこいけど…

なかつたりひひこむり…

玄関

太一

「やつぱないよな…」

やはりなかつた… どうすつかなあ…

太一

「んじゃあ…つまむ…」

「み捨て場

太一

「何もなし…」

ん? — 応詰つておくけど…

材料探しだからな!?

太一

「ん~… どこにもない…………あつ…………」

工場

太一

「始めからここにこればよかつたな…」

やつぱり工場には沢山材料があるよな…

太一

「さて… 必要な部品が手に入つたわけだし…」

俺は再び学校に向かつた…

第3話／5日目／朝（前書き）

かなり遅くなりました…（—）

### 第3話／5日目／朝

霧

「ふう…、なんとかノルマは達成したかな…」

私は、一昨日美希から言われた名前の人にはキャンプの話を持ちかけてみた。

名前は

- 1・島 友貴先輩
- 2・桜庭 浩先輩

だ。

昨日、二人が一緒にいるときに持ち出してみた。

霧

「すみません、島先輩、桜庭先輩、お話をあるのですが…いいですか？」

友貴

「どうしたの、佐倉？話つて？」

霧

「はい、日曜日にキャンプをやるんですが…どうかなって…」

桜庭

「キャンプか……ふつ……あの時以来からやつていらないな……」

友貴

「そうだなあ……うん、いいよ。俺は参加するよ。」

霧

「ほんとですか！？」

友貴

「ああ、桜庭はどうする？」

桜庭

「断る理由がないな……参加する。」

霧

「おー一方、ありがとうございます。それでは、土曜日に坂を降りたところにあるファミレスで打ち合せがあるので来てください。時間は10時です。」

友貴

「わかったよ、それじゃ」

桜庭

「わかった」

先輩方は教室へ戻つて行った。

美希

「きりーーー！」

美希が一ロードながら走つて來た。

美希

「どうだつた！？？先輩たちには聞けた？」

霧

「うん、聞いてOKがとれたよ」

私は嬉しそうに美希に報告した。

美希

「やつたね 私の方も桐原先輩のOKがとれたよー」

霧

「そつかそつかー」

曜子

「私の方も大丈夫よーーー！」

支倉先輩が一瞬にして出てきた。

美希

「うわあー！？？びっくりしたあーーー。OKだつたんですね？」

曜子

「ええ、土曜日の事も話しておいたわ。」

美希

「そーですか、それじゃあこれで問題ないですね。」

曜子

「それじゃ、またあした…」

支倉先輩がまた一瞬で消えていった…

霧

「それじゃ、行こうか」

美希

「そうだね 行こう」

私たちは教室へ向かつた。

## 第6話／6月1日（禮書丸）

凄い長い間…すみません…（――――――；

AM 10:00

「ということで、明日の」とひつひつして集まつてもらいました」

美希は拍手をしながらみんなに言つた。

「それで、何について話すのよ」

桐原先輩は退屈そうに頬杖をしながら言つた。

「それは私が…。えつと、明日のキャンプで何が必要かつてことで話すために集まつてもらつたんですね？ 支倉先輩？」

私は説明をし、あつてるかを支倉先輩に尋ねた。

「ええ、その通りよ佐倉。それで集まつてもらつたの。用意はしつかりしないといけないわ。みんな、それぞれ意見を言つて。」

支倉先輩がみんなに意見を促した。

「そりですねえ…。テントは必要ですね。」

宮澄先輩が考えた末の意見を言つた。

「それは当たり前でしょ、姉貴…。」

島先輩がため息をつきながら宮澄先輩に言つた。

「それじゃあ、友貴は何が必要だと思うの？」

宮澄先輩が島先輩に言つた。

「ん……暇にならないものとか？ 例えば…ありきたりで『トラン

プ』とかかな？ どうかな？」

島先輩がみんなに尋ねた。

「うんうん、それは必要っすね。」

美希が二口二口しながら同意した。

「UNOとかもいいよね」

私は島先輩の意見に付け加えた。

「うんうん、UNOもいいよね。さすが霧。」

「まあ、それは各自で考えるとして…他には何かない？？」  
支倉先輩が各々の意見をさらに促した。

「ん…他にはって言われてもな…」

「大切なものを忘れているぞ。」

各々が考へているときに、突然桜庭先輩がいい始めた。

「何？」

皆が一斉に言つた。何があるのだろうか…。

「決まつている、ラジオだ。」

桜庭先輩がさぞ当たり前かのように言つた。

「あつ…」

みんな、驚いた。私も…

大切なものを…忘れるといひだつた…

みんな…押し黙つた…。明日はラジオ放送…、太一先輩の…。

「そつそれじやあ、次は誰が何を持つて行くかを決めましょ…」

美希は暗い空気を紛らわすかのように、明るく言つた。

「そつね。それじやあ…」

……

「それじやあ、明日の9…00にまた…」

桐原先輩が家に向かつて帰つて行つた。

「それじやあ…私たちも帰りましょ。」

「 そうだね、帰ろつか。明日の準備もしないといけないしね。」

宮澄先輩と島先輩がふたりそろって帰つていった。

「 またな…」

桜庭先輩がそれだけを言つて帰つていった。

「 それじゃあ、私たちも…」

「 そだね、帰ろつか 」

「 ええ、それじゃ…」

私たちは、各自の家に帰り、色々な思いを描きながら寝た……

あらがといひござります？

## 第一部／最終話／前編（前書き）

勝手ながら、第一部とつまつた？といつれ、見てやつてくださいこゝへ  
（――）三々

「ふうう……」んなもんかな……」  
一週間の最終日の今日、俺はラジオ放送を録音しておいたテープを  
セッティングした。

今日で最後：

「早いよなあ……一週間つて……」  
毎回毎回思つ……早いなつて……  
「さて……まだまだ時間があるし……ちよつと散歩してきますか……」  
俺は残りの時間をこの一週間の街を……いつもと……何も変わらない街  
を散歩することにした……

「やつほーー！」

「遅いよー、美希……」

美希が指定の時間を30分遅れて来た。皆を待たせた。

「遅いわよ、山辺。」

「遅いですよーー！」

「遅いわね、山辺。」

みんなから文句を言われてこむ。しかし……

「ごみん！」

「まったく……、それでは、行きましょー。」

「ああ（わかった）」「

私の促しで取りあえず出発した。

「やつと到着した……」

美希が地面にぺたりと座った。

「ついたね、じゃあ、テントを設喰しましょ。」

「そうね、それじゃあ……支倉先輩。」

「ええ、わかつたわ。」

私の合図で、桐原先輩と支倉先輩がテントを……

「えつと……水は……」

「じゃあ、俺とラバが行くよ。いいよな?」

「ああ、わかつた。」

島先輩と桜庭先輩が行くことになった。

「じゃあ、私たちは何をしましょ。」

宮澄先輩が尋ねてきたので……

「じゃあ、お昼ご飯を兼ねた晩御飯を作りましょ。」

「そだね、そうしよ。」

「わかりました、準備をしましょ。」

私たちは晩御飯の準備を始めた。

「……時間か……」

あれから少し散歩を兼ねて山を散策した。街を散歩しても仕方がないしな……。

「これといって……あまりいいものは無かつたし……まつ、いつか……」

散策の結果はほぼ零に近い……それでも暇つぶしにはなったかな……

「……後5分……」

後5分後に世界はリセット…悲しいな…

「さて…祠へ向かうか…」

俺は残りの時間を使い、祠へ向かつた。

「後2分ですね。」

「（そうだね、そうね、だな、ええ、ああ）」

みんながあの人の…黒須先輩のラジオ放送を待つて…

今日で最後…か…

「悲しいな…」

「え？」

「ううん、何でもないよ。」

私はついくちばしってしまった。

「ほら、始まるよ。」

「（うん、ああ、ええ）」

そして…ラジオ放送が始まった。

「誰か…生きている人いますか？」

「それでは、また来週……」

一週間がおわった…

## 第一部／最終話／前編（後書き）

ありがとうございました。また、感想をおまかしてこまゆ（\*^-^\*）

## 第1部／最終話／後編（前書き）

取りあえず、第一部は完結です^\_\_^（――）^\_\_^

## 第1部／最終話／後編

「…」  
「…」

「誰か行きている人…いますか？」

「な…んて、今田は堅苦しい言い方を…初放送の言い方をしたんだ  
けど…」

「それはなぜか！？ と…」

「実はだね…」

「これは録音したやつなんだ！！！」

「いや、まあ…だからどうしたってこともないんだけどさ…」

「まあ…いいじゃん？ちょっと試したかっただけだからさ」

「さて…みんなは、思い出を大切にしていますか？」

「俺は…久々に思い出したよ…」

「あの…大切な仲間たち…」

「大切な人…」

「今…何をしてるかな…」

「一週間…俺は…懐かしい思い出を思い出しながら…過いしまった…」

「あいつがしてくれたこと…」

「あいつが怒ったこと…」

「そして…みんなで笑いながらバカ騒ぎしたこと…」

「その何れもが大切な思い出です…」

「つと…私情でしたね」

「みなさんも、思い出は大切にしましょー」

「」の先…それが…思い出で…助けられる」ともあります

「忘れないで…」

「あなたには…大切な人がいる…」

「みんなの隣には…必ず大切な人がいる…」

「どうか…忘れないで…」

「つと…そろそろ時間のようです」

「おハガキや、感想の手紙は…」

「群青学園放送部～太一のail n i g h t w o r l d～」

「エビんどんおくれ！」

「つて、そんなものがあるかい！」

「…何を一人つっこみをしてるんだか…」

「それでは、また来週…」

## 第1部／最終話／後編（後書き）

つまらない駄作だったと思いませんが…どうか、感想をお待ちしていますー。→ 三（ ） 三 ←

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6900a/>

---

CROSS†CHANNEL ~ Again to that world ~

2010年10月10日04時13分発行